

パスパ文字印「gi」の近代における使用例

吉池孝一

羅福成著『西夏国書類編』(東山学社印、1915年)の叙跋の最後に「羅福成記」と自署があり、その後にパスパ文字で「gi」(記)とある円形の印が押されている(付図参照)。羅氏一家は古代文字や民族古文字資料の収集と研究で有名であったことからみて、このような印も所蔵していたのであろう。

なぜ西夏語の研究書の序にわざわざパスパ文字の印を押したのかという不可解な点はさておいて、この近代のパスパ文字印の使用例から何が分かるかということを考えてみた。じつは明確なことは何も分からないのであるが、二つの点において暗示とでも言うべきものを得ることができる。

一つは「gi」印の使用法である。パスパ文字が刻された元代の印鑑には、官印とよばれる大型のものと、私印と呼ばれる小型のものがある。後者の私印には、様々な形態、内容のものがあり、『宋元古印輯存』(楊広泰編選。文物出版社、1995年)や『中国歴代印風系列 元代印風』(黄 惇主編。重慶出版社、1999年)や『唐宋元私印押記集存』(孫慰祖主編。上海書店出版社、2001年) 更にはサイト「古代文字資料館」でその実物及び印影を見ることができる。ちなみに「gi」印は私印である。現存する実物やその印影は数多く見ることができるのだけれども、実際に「gi」印を押した元代の文書は寡聞にして知らない。どの様に使用されたのかも分からない。その点で、自署の後に「gi」印を押すという用法は参考となる。古代文字や民族古文字資料の収集と研究で有名であった羅氏一家のもとには様々な資料が集まっていた。それらの資料の中に「gi」印の類を押した文書を認め、自著において同じように「gi」印を利用したのではないかとあらぬ事を考えている。

二つ目はいまま少しまじめな話である。「gi」印の用法からみて、羅氏はこのパスパ文字が漢語の「記」にあたることを知っていたと考えて大過ないであろう。この手の私印には「王記」「王 gi」や「李記」「李 gi」などがあり、現在でもその実物を見ることができる。こうしたことを思い合わせるならば、「gi」を分析的に捉えていたかどうかは別にしても、同種の印を参照し「gi」をひとかたまりの単位として「記」に当てることはそれほど困難ではない。パスパ文字使用の伝統が絶えた元代以降、中国の人たちがこの文字に対してどの様な認識を持ちそしてどの様に読み解いたかということについて、パスパ文字研究の前史として知りたいところである。しかしながら、その状況はなかなか表面に現れてこない。羅氏の例を、表面に浮かび上がった一例として捉えるならば興

味深いものとなろう。

一字即能代替兩漢字者亦有兩字難於分析者
以上均但於原文下空一格載正音及徵引文句
其并音亦不詳者則但舉文句其無文句可舉者
則不採錄

一 凡徵引文句先列原文次列漢義例如原文為金
黃漢文為黃金其文法不同不可一概以漢文律
之乙卯三月上虞羅福成記

①